

令和8年度へ、さらに一步 ~令和7年度「学校反省・振り返り」より~ 岐阜市立岐阜小校長 清水也人

I. 今年度の学校反省・振り返り — 数値が示す「確かな成果」と「次の課題」—

1. 成果① 子どもは「認められ、見守られている」と実感している

【児童アンケート（7月→12月）】

- 「友達はほめてくれる」 166 → 185 (+19)
- 「おうちの人ほめてくれる」 182 → 204 (+22)
- 「自分にはよいところがある」 142 → 156 (+14)
- 「夢中になれる学校の活動がある」 183 → 193 (+10)

▶ 学校・家庭・地域の多くの大人に見守られ、賞賛が循環する環境が広がったことが、数値として明確に表れています。

2. 成果② 『学校運営協議会』『地域』の考え方を、学校経営の軸として実装できた

今年度、協議会・地域で大切にしてきた考え方を学校の重点として職員全体で共有し、次の3点に取り組んだ。

- 主体性の育成
- 自己肯定感の向上
- 自校肯定感・安心感の醸成

▶ 特に、学年・学年部チーム担任制の導入により「担任一人の努力」に依存せず、複数の大人で子どもを見取る組織へと転換できた。

このことは教職員アンケート「心理的安全性」「励まし合い」の項目にも表れています。

3. 一方で、明確になった課題

課題① 学習面・個別支援の密度が、年度後半にやや低下

- ◆ 「分かるまで教えてくれる」
- ◆ 「思いや願いを大切にしてくれる」

課題② 主体的活動の“実感”の弱さ

- ◆ 活動の量は増えたが、「自分たちで決めている」という感覚まで届いていない子どもがいる
- ◆ 同じように賞賛しても、満足できない子どもが生まれ、分断の懸念もある

▶ 大人(教師も)が整えすぎてしまい、子どもに任せ切れていない場面が見えてきました。

II. 来年度の学校経営の方向 ー 課題から必然的に導かれる重点方針 ー

◇来年度、特に大切にしたい3つの方向

① 学級・学年の安心感を「見える化」し、学校文化として定着

- ・「どの学年でも、どの大人でもつながっている」
- ・「失敗しても大丈夫」と感じられる土台づくり

② 主体性を育む体験活動の“質的転換”

- ・「体験させる活動」から
- ・「自分たちで決め、やり切ったと実感できる活動」へ

③ 称賛が循環する学年チーム体制の深化

- ・個人への称賛 → 集団・役割・挑戦への称賛へ
- ・「できた結果」だけでなく「考えたこと・判断したこと」を価値づける

【キーワード】「自分ごと」「判断」「任される」

- ▶ 子どもも大人も「誰かがやってくれる」から一步踏み出す学校経営へ。

III. その具体としての「ふるさとふれあいフェスタ」の再定義～つながり～

1. なぜ、この行事なのか

「ふるさとふれあいフェスタ」は、災害時の地域の姿そのものです。

- ・岐阜小校区地域の約500人が、学校に集まり
- ・異学年の子どもと異年齢の地域の大人が混ざり（フェスタ家族）
- ・校区内を歩き、学校に戻る

- ▶ 今年度の学校を避難所に想定したHUG訓練で以下の課題が明確になりました。

- ◆ 情報不足
- ◆ 役割の曖昧さ、コミュニティ・世代間・文化間の「垣根」
- ◆ 「誰かがやってくれる」という意識

- ▶ だからこそ、日常の行事の中で「判断する力」「自分ごと感」「危機感」を実感する場として、このフェスタを一段「岐阜小学校20周年の『節目』へ」進めたいと願っています。

2. 防災フェスタ構想の要点

- ◆ 新しい行事を増やす提案ではない
- ◆ 行事の枠組み（フェスタ家族・ウォークラリー形式）はそのまま

- ❖ 変えるのは、チェックポイントの「問い合わせ」
- ❖ ゴールは **学校=避難所** - 体育館・昇降口を見て
「ここに500人来たらどうなるか」を体感 - 短時間のミニHUG体験で
「判断しないと回らない」現実を実感

▶ 子どもも大人も「**自分も役割を果たさなければならない**」と気づく体験へ。

このフェスタの再定義は、**金華・京町という枠を超えて、岐阜小学校区として「共に子どもを守る地域」を育てるための一歩**と位置づけています。

どちらかの地区を取り込むものでも、役割を奪うものではありません。

むしろ**両地区が抱える課題や危機感を共有し、子どもを軸に“もっとつながる”**きっかけをしたいと考えています。

だからこそ、地域の皆様と共に検討しながら、誰も置き去りにしない形で進めていきます。

★最後に

今年度、子どもたちは「認められ、見守られている」と確かに感じています。

次に必要なのは、「**自分で考え、判断し、役に立てた**」という実感です。

防災は、危機が見てから始めるものではありません。危機感を共有できた地域から、防災は始まります。

この防災フェスタは、うまくやることが目的ではありません。地域の「つながり」の大切さを再確認することが最大の目的です。

「失敗しても大丈夫」と感じられる岐阜小学校区のあたたかい大人の眼差しの中で、子どもたちが「自分たちの判断で、やってみた（挑戦してみた）！」

そして、**子どもも大人も「本当に困る」ということを「自分ごととして」一度実感、地域で共有すること**に意味があります。

学校反省を、来年度の学校経営へ。そして、子どもたちが地域とともに歩むさらに一步に。

「ふるさとふれあいフェスタ × 防災フェスタ」構想

【全体共通の前提】

- 既存行事（フェスタ家族・ウォークラリー形式・規模）は維持します
- 目的は「大人・子どもが“自分が困る場面”を実感し、危機感を共有すること」
- ゴールは学校=避難所を体感すること
- 今年度は構想・設計段階、完璧を目指さず無理のない実装を重視します

【学び部会】 — 防災フェスタを「学び」にどうつなげるか —

【部会の役割】

防災フェスタを一日限りのイベント → 子どもの主体性・自己肯定感につながる学びへ位置づける視点を整理する

検討観点（あくまで参考例）

- 異学年集団で活動する意味を、どんな学びとして捉えるか
- 子どもが「守られる存在」→「考え、判断し、役に立つ存在」に変わる場面はあるか
- ウォーク中の「問い合わせ」は、正解探しではなく判断する力を育てているか
- ゴールの「学校=避難所体感」で、子どもにどんな“気づき”を持ち帰らせたいか
- 今年度実施したHUG訓練で見えた“詰まり”を子どもの言葉に置き換えると何になるか
- フェスタ前後で、学級活動・総合的な学習とどう接続できそうか
- フェスタ後、家庭で防災の話題が生まれる“問い合わせ”は何か

学び部会が【決めなくてよいこと】

- × 指導案の完成
- × 評価規準の厳密化
- 「学びの方向性」を示すこと を優先で

【地域行事部会】 — 500人規模で「無理なく」「楽しく」成立させる —

【部会の役割】

「ふるさとふれあいフェスタ」の良さを壊さず、参加率を落とさずに防災フェスタへ進化させる

検討観点（あくまで参考例）

- ウォークラリー形式を維持したまま、防災要素をどう組み込むか
- 「防災」と聞いても保護者世代が身構えず参加できる表現になっているか
- チェックポイントの問い合わせは、重すぎず、でも考えさせるバランスか
- ゴールの学校（避難所体感）は、滞留・混雑が起きにくい導線になっているか
- 地域の大人（自治会・育成会・民生等）が「1人1役」無理なく関われる設計になっているか
- 今年度HUG訓練の学びを、行事として“分かりやすく見せる”工夫は何か
- 行事全体として「楽しかった」「来年も参加したい」と思えるか

地域行事部会が【決めなくてよいこと】

- × 防災の専門的内容
- × 安全管理の細部○ 「行事として回るかどうか」 を優先で

～部会別 検討観点シート（あくまで案）p2～

【安全安心部会】— 危機感は上げる、危険は出さない —

【部会の役割】

危機感を実感させつつ、事故・混乱を防ぐ最低条件を整理する

検討観点（あくまで参考例）

- 「判断を迫る体験」と「実際の避難・走行・訓練」を明確に線引きできているか
- ゴールの学校＝避難所体感で見せてよい場所／避けたい場所 はどこか
- 体育館・昇降口で「500人来たら起きる課題」を安全に体感できる方法 になっているか
- ミニHUG体験は短時間・安全・混乱しすぎない 設計になっているか
- 11月開催を想定し、天候・寒さ・体調面への配慮ができているか
- 高齢者・低学年児童が多い前提で、リスクの高い行為が含まれていないか
- 消防・水防等の関わり方は「短く・的確・負担が少ない」 か

安全安心部会が【決めなくてよいこと】

- × 避難所運営マニュアルの作成
- × 本格的な防災訓練設計
- 「安全の最低条件」を示すこと を優先で

【各部会で最後に共有したい一言】

この防災フェスタは、うまくやること が目的ではありません。地域の「つながり」の大切さを再確認することが最大の目的です。

「失敗しても大丈夫」と感じられる岐阜小校区のあたたかい大人の眼差しの中で、子どもたちが「自分たちの判断で、やってみた（挑戦してみた）！」

そして、子どもも大人も「本当に困る」ということを「自分ごととして」一度実感、地域で共有すること に意味があります。